

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：21201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530156

研究課題名(和文) ロシア地政学の系譜から検証する「北方領土問題」

研究課題名(英文) The Northern Territories Problem from the Point of View of Russian Geopolitics

研究代表者

黒岩 幸子 (KUROIWA, YUKIKO)

岩手県立大学・高等教育推進センター・教授

研究者番号：80305317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：日本とロシアは戦後70年になるうとする現在まで、第二次世界大戦末期に生じた領土問題のせいで平和条約を締結できぬままである。日本ではこの問題の解決に向けたさまざまな議論があり、研究も進んでいるが、ほとんどは日本側からの視点で問題をとらえようとするものである。当該研究は、ロシア側にその視座を持ち込み、特にソ連邦崩壊後にロシアに定着した地政学的視点から領土問題を再検証するとともに、両国の係争地となった千島列島の歴史を含めて現在の北方領土(南クリル)の現状把握に努めた。

研究成果の概要(英文)：Japan and Russia still have not signed peace treaty because of the territorial problem, which occurred almost 70 years before, in the last moment of WWII. There are a lot of works on this problem in Japan, but most of them are written from the point of view of Japanese. This research aimed to clarify the territorial problem from the geopolitical point of view of Russia. Geopolitics was not officially accepted in USSR, but it got popularity among Russian political and academic elite since the period of perestroika. This research also try to clarify the reality of Kurill islands, which had been the closed region during the Soviet period.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学 国際関係論

キーワード：北方領土 南クリル 地政学 ユーラシア主義 ネオ・ユーラシア主義

1. 研究開始当初の背景

報告者は、当該研究の前にも3年に渡って日口領土問題をテーマとする科研費助成を受けていた。それは主に日本国内における「北方領土」という神話形成プロセスを追ったもので、いずれロシア側の見方も明らかにする必要性を感じていた。特に、1991年のソ連邦解体前後からロシアには自国領土や国際関係を地政学的に見直す新たな潮流が生まれ、領土問題にも様々な見解が出てきた。かかるロシア側の内的要因を明らかにしなければ、今後日本は北方領土問題に関してロシアと議論を噛み合わせることができないと考えた。

2. 研究の目的

ソ連が消滅して新たなロシア国家が従前とは異なる領土観をもって日口領土問題に挑んでいるのに対して、日本側は、従来の日口二国間関係の枠組みで問題をとらえて返還されるべき島数や面積に拘泥した内向きの論争を繰り返している。このような状況に鑑み、新生ロシアが持つ地政学的な視点を明らかにし、また現実の係争地域の変化もとらえたうえで、ロシア側の南クリル(北方領土)実行支配に対する内在論理を検証することが当該研究の目的である。

3. 研究の方法

(1)ロシアで1980年代後半から広く使われるようになった地政学的視点を明らかにする。ソ連時代にはブルジョアの学問としてタブーであった地政学が、どのようにして人口に膾炙するようになったのか、そのプロセスを追う。地政学は1980年代末期にユーラシア主義が復権したことを契機としてソ連に知られるようになったので、ユーラシア主義の系譜を辿りつつ、地政学の浸透を調べる。1980年代末からソ連で復刻されるようになった文献を渉猟し、ソ連解体前後から現在に至るネオ・ユーラシア主義の潮流を含めて出版物やマスメディアの言説からロシア地政学の状況をつかむ。

(2)日口が争っている南クリル(北方領土)の現状を明らかにする。日本側はこの地域が「日本固有の領土」であることを主張してソ連の実行支配以降の南クリルの実態にさほど関心を持っていないため、情報が少ないうえに、閣議了解によってロシア側ビザを取得して入域することは禁じられている。そこで日口が合意したビザなし交流の枠で現地に入域し、可能な現状把握を行う。またソ連解体後にそれまで公表されなかったクリル諸島(千島列島)の歴史がロシア側の研究者によって公刊されるようになったので、かれらの南クリルに対する歴史観を知る。

上記の(1)(2)から得た知見を総合して日本の対口領土問題の対応を検証する。

4. 研究成果

(1)ロシア地政学の出現

ソ連において地政学は、資本主義国のブルジョアの学問として認められず、公式には地政学的な視点から軍事や国際関係が語られることはなかった。しかし、1980年代後半にソ連でペレストロイカが始まり、マルクス・レーニン主義の公的イデオロギーに公然と反論が加えられる環境が生まれると、広大なソビエトの領土とそれを取り巻く国際環境を地政学的に検討しようとする動きがでてくるのは自然な流れでもあった。

地政学の創始者であるラッツェリ、チェレン、マハンらは19世紀後半のヨーロッパに現れ、国家が必要とする生存空間、覇権を得るために必要とされるハートランド(中核地)とリムランド(周辺地)の概念を提示した。また世界をランド・パワー(大陸勢力)とシー・パワー(海洋勢力)の対立としてとらえる二元論も現れた。

これらの視点は、帝国主義時代の国家権益の拡大や外交戦略の正当化に利用された「古典的地政学」である。1970年代から西側では、これらを超克して、地球環境や地域的国家関係を重視する「批判的地政学」が生まれる。

しかし、ソ連/ロシアにそれまでのタブーを破って現れたのは、もっぱら古典的地政学だった。これは、ソ連崩壊前後から従来のソ連統一のイデオロギー的主柱が失われ、領土的一体性も崩れたために、新たなロシア国家としてのアイデンティティーを確立するためにロシア領の新たな意味付けが必要になったということである。

2000年代には、地政学は大学の教養科目として教えられるほどに一般化してロシアで学問としての地位を獲得した。すでに西側では退けられた古典的地政学が、現代ロシアで理解されている地政学と言える。

古典的地政学の論理を知ることが、現代ロシアの地政学的見地を知るポイントになる。

(2)ユーラシア主義の復権

ソ連で地政学が見直され始めた時期は、ユーラシア主義の復権と重なる。ユーラシア主義は、ロシア革命後の1920~1930年代にヨーロッパに亡命した若手知識人の間に生まれた思想潮流と社会政治活動である。かれらは革命を否定しながらも、新しく誕生したソ連国家が従来の西欧追随をやめて多民族多文化のユーラシア国家として統合された側面を評価していた。

ロシアの多才な知識人が自らをユーラシア主義者と規定して亡命先のヨーロッパ各地で活動したが、その意識はまちまちで、一部はスターリン時代のソ連に帰国して弾圧された。ユーラシア主義は1930年代には自然消滅してゆくが、その中の中核的人物であったピョートル・サヴィツキーは、ロシア地政学の父と呼ばれ、ソビエト国家誕生を契機としてソ連領内に視座を据えた初めての口

シア独自の地政学的見解を発信した。サヴィツキーは、ソ連が広大なユーラシア大陸を統合する大陸国家として、安定した発展を望んだ。

ユーラシア主義は、ロシア帝国は破綻したが、ソ連国家の方向性がまだ定まらぬ時期に、新たな国家理念を求めようとした知識人の苦闘とも見られる。その理念は共産主義を否定したために、ソ連ではタブーであったが、ソ連邦崩壊が近づき、言論統制が緩んだ時期に復権して注目された。それは、ソ連崩壊で社会主義イデオロギーを失った新生ロシアが新たな国家理念を求めている時期であり、将来への不安は過去への回帰をもたらした。帝政ロシアからソ連への移行期は、ソ連から自由なロシアへの移行期に重なって、ユーラシア主義はロシアの知識人の間に広まった。

(3) ネオ・ユーラシア主義の興隆

ソ連ではタブーであったユーラシア主義の復権と地政学の導入に貢献したのは、アレクサンドル・ドゥーギンである。自らをサヴィツキーらの後継者と名乗り、ユーラシア主義者の著作の出版に当たるとともに、地政学の入門書、教科書を多数書いて広めた。

ドゥーギンは、ユダヤ人排斥や民族主義的言辞で注目されたが、その思想的中核は徹底した反米主義、反北大西洋主義である。ソ連崩壊によって世界がアメリカの一局支配に陥ることに反対して、新生ロシアがポスト冷戦期の世界で一定の地位を占める必要性を強調する。その思想は、ナショナリスティックな側面と地政学的見地から対外関係を築こうとする現実主義的側面の双方を持っている。ソ連崩壊後の新たな国家理念を地政学的思考から見いだそうとするドゥーギンや、その他の国粹的な理念を標榜するグループはネオ・ユーラシア主義者として現代ロシアで認知されるようになった。

ドゥーギンは、ロシアの中では希有な北方領土返還論者である。彼は、シー・パワーとして台頭する中国、同じくシー・パワートして世界を席卷し、ロシアと相容れないリベリズムを押し付けるアメリカへの反発から、ベルリン・モスクワ・東京というユーラシア枢軸を提唱する。北方領土を日本に返還する代わりに、日本は日米安保条約を解消し、良好な日口関係を構築して中国の覇権にも立ち向かうという、全く実現性のない構想ではあるが、従来のソ連の領土観とは異なる柔軟性を示していることは確かである。

ユーラシア主義もネオ・ユーラシア主義も、プラスであれマイナスであれロシアが常に多大な影響を受けてきた西ヨーロッパに失望したときに、東方に向かおうとする共通点を有する。実際、欧米との軋轢が重なるプーチン政権は、極東重視を明言して日口領土問題に解決の意欲を示している。プーチンもユーラシア主義の重要性を公の席で述べたことがある。

(4) クリルの歴史と現状

ロシアの国家としての発祥はキエフ・ルーシにあり、常にヨーロッパ地区が国家の中心であり続けた。ユーラシア主義はそのような西欧中心主義を批判してロシア東方の意義を再評価した。ソ連時代もロシア中央への資源供給地の役割を担わされた周縁地域でしかなかった極東は、ソ連崩壊後にロシアの新たな発展の可能性を潜在させた希望の地に変わった。地政学的視点も同様にユーラシア沿岸部に位置する日本、さらには東アジアへ通じるルートとしての極東の価値を示した。

戦後ソ連が占領した樺太・千島は、領土問題を残して冷戦構造の中に置かれたままだったが、その解決を求める気運が日口両国に高まった。その領土問題は、いくつかの解決のチャンスを見逃しながら、結局現在まで決着を見ていないが、冷戦期にはソ連が完全に国際社会から遮断していた南クリル（北方領土）が、部分的に開放されるようになった。また、1990年代以降はクリルの歴史や地誌を扱った文献が公表されたり新たに公刊されたりするようになった。

第二次世界大戦終結末期に占領された樺太・千島には、戦争直後から何万人ものソ連人が入植して、日本人を追放した後に残った日本のインフラ・設備をもとにソビエト社会を急速に確立していった。千島列島には、日本の設備のある北部と南部に入植した。日本時代の北千島は漁期だけの出稼ぎ島だったが、ソ連人は定住した。南千島では、択捉、国後、色丹の三島に定住した。

千島列島は、オホーツク海から太平洋への出口に連なっており、重要な軍事拠点になるとともに、定住した民間人は漁業基地で働いた。

領土交渉が再開されて進展していた1992年から、南クリルと日本の間で領土問題の解決と住民同士の友好交流を目的としたビザなし交流が開始され、現在に至る。ビザなし交流の日本側参加者には制限があるが、報告者は2011年7月の訪問団に参加する機会を得て択捉島及び国後島に3日間上陸、視察した。この3島は過去4-5年、ロシア側が本格的に開発を始めており、飛行場、港、道路等のインフラ整備や住宅環境の改善等が進んでいる。

(5) 日口領土問題をとりまく新たな状況

領土問題の解決を見ぬままに戦後70年が過ぎようとしている現在、領土問題を取り巻くグローバルな環境そのものが変容してきた。まず、海洋権益にたいする各国の意識が明確になり、さまざまな摩擦を生んでいる。

地球温暖化により北氷洋の船舶航行の可能な時期が長くなり、新たに北極海航路が開発されている。アジアからヨーロッパへの貨物は、従来の西回りよりも3割以上短縮される。その通過点としてロシアは南クリルの開発を志向しており、日本が交渉に応じなければ

ば、第三国の参画を考えている。かつての周縁地域が経済的価値を持つ航路の一部へと変容する可能性がある。

海疆への進出を近年強く志向しているのが中国であり、その中国と日本は尖閣諸島の領有をめぐる争っている。中口は第二次世界大戦終結 70 周年式典を共同で行う予定もあり、領土問題で協力して日本と対決する可能性もある。海洋権益がグローバルに捉えられるようになった結果、北方領土、尖閣、竹島という日本を取り巻く三つの領土問題が同列で論じられることも増えている。日本はロシアだけをターゲットに北方領土の解決を探るのではなく、他二つの問題と合わせて検討する必要に迫られている。

日本が固有領土論だけに軸足を置いて四島返還だけを要求し続けても隘路は開けず、また領土の回復のみが国益を意味する時代でもなくなっていることに気づく時期に来ている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

KUROIWA, Yukiko, “Russo-Japanese Territorial Dispute from the Border Region Perspective”, *UNISCI Discussion Papers*, 査読有、2013, No.32, 187-204

KUROIWA, Yukiko,
“Northern Challenges:
The Japan-Russian Border Dispute and Local Voices”,
Journal of Borderland Studies 査読有、2011, 283-295

КУРОИВА, Юкико,
«Проблемы пограничных территорий Японии на примере Нэмуру»
Институт истории, археологии и этнографии народов Дальнего Востока ДВО РАН, *Материалы XXV Российско-японского симпозиума историков и экономистов ДВО РАН и района Кансай (Япония)*. 査読有、2010, 131-140

[学会発表](計 1 件)

黒岩幸子「北方領土」をめぐる 20 年 ボーダーランドの実態と仮想 ロシア・東欧学会、2011 年 10 月、東京国際大学

[図書](計 3 件)

黒岩幸子、東洋書店、千島はだれのものか 先住民・日本人・ロシア人、2013、64

岩下明裕編、藤原書店、別冊『環』 日本の「国境問題」 現場から考える、2012、黒岩幸子「北方領土 とは何か 戦後の失われた二〇年」74-84

野中進他編、東洋書店、ロシア文化の方舟 ソ連崩壊から二〇年、2011、黒岩幸子「ロシアにとっての北方領土問題」364-373

6. 研究組織

(1)研究代表者

黒岩 幸子 (KUROIWA, Yukiko)
岩手県立大学・高等教育推進センター・教授
研究者番号：80305317

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：